

39、40 節「両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰って行った。幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがその上にあった。」

ルカ 2 章 38 節と 39 節との間（12 年間）には、いろいろの出来事がありました。その間の出来事をマタイの福音書から知る事が出来ます。

マタイ 2：1～12 節「東方の博士たちがイエス様を礼拝するためにベツレヘムに来る。」

13～15 節「ヨセフ一家がエジプトに逃げる。」

16～18 節「ヘロデによるベツレヘム地方の 2 歳以下の男の子の虐殺。」

19～23 節「ヘロデの死。イエス様がイスラエルの地に、更にナザレに帰還した。」

41～52 節 さて、イエス様の公生涯は 30 歳位からです。（3 章から、公生涯に入ります）このころから主は人々の前にご自身を現わされました。それ以前の少年時代のイエス様に関して、聖書は多くを語っておりません。ですから、少年時代のことが書かれているこの箇所はとても貴重です。

#### ——— 過越しの祭りといエス様 ———

さて、イスラエルには年に 3 回大きなお祭りがありました。それは①過越しの祭り、②七週の祭り、③仮庵の祭りの 3 つです。当時のイスラエル人は、この季節に国内から、世界各地からエルサレムの神殿に集まりました。

①過越しの祭り 神はモーセにイスラエルの民にエジプトからの脱出を命じられました。その時、この地の長子や動物の初子が殺されました。しかし、羊の血を塗った家は、その裁きには合わないで、神の裁きはその家を過ぎ越されて、その中にいる人々は救われました。（この羊はイエス様の象徴です）

②七週の祭り ペンテコステ、五旬節、刈り入れの祭り、初穂の日 とも言われています。新麦でこしらえたパンを神に捧げます。

③仮庵の祭り この祭りの間は仮小屋（粗末な掘っ立て小屋）を作って、貧しかったありし日の天幕生活を思い出して、記念して祝います。

でもエルサレムから遠く離れている所に住んでいる人々は、そう簡単に 3 回も集うことは出来ません。ですから遠距離の人々は（この場合、ヨセフとマリアの場合もそうですが）年に 1 度、それも一番大きな祭りの時だけ（例えば、過越しの祭り）、エルサレムに上って行きました。もちろん毎年ですね。

——— 帰り道の出来事 ———

イエス様が12歳の時の出来事です。親戚や知人たちと一緒に、過越しの祭りのためにエルサレムに上り、その帰り道の（ナザレに向かっている）時のことでした。ヨセフとマリアはその時、イエス様がいないことに気が付きました。ナザレに帰る一行の中にいると思って、その人たちの中を探し回りました。でも見つかりません。仕方がないので、二人はとうとう、エルサレムまで引き返しました。

——— 神殿の中でイエス様を見つけた ———

46節 そして、出発した日から3日目に両親は、我が子イエス様をやっと神殿の中で見つけました。その時イエス様は何と神殿の中で、多くの律法の教師たちの真ん中に座って堂々と討論をしていたのでした。

47節 神殿に居並ぶ多くの教師たちは、この12歳の少年の洞察の深さに驚嘆していました。この少年のする質問の中には、すぐれた知恵がありました。また、その答えることばには、彼らの理解に勝るものがありました。

48節 しかし、我が子を一時でも見失った母マリアは気も動転して、すっかり取り乱しておりました。そして、つい彼女は激しい調子で我が子を叱りました。「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを探していたのです。」

49節 これに対して、イエス様は次の様に答えました。「どうしてわたしを探されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

そうです。神殿はイエス様の真の父、父なる神様の家だったのですね。

——— 母は・・・心に留めておいた ———

50節 これらの出来事に両親は遭遇したのですが、でもその意味を両親はなかなか理解出来なかったようでした。しかし、理解できなくとも母親のマリアは何かを感じておりました。

51節 ですから「母はこれらのことをみな、心に留めておいた。」のでした。

神様の真実は、私たちよりもはるかに大きなもので、及びもつきませんね。でもいつか、その大きな真実を理解して受け入れる事が出来る時が必ず来るはずです。その時まで、心の中にしっかりと私たちも留めておきたいですね。

——— イエス様の18年間の生活 ———

この後、イエス様は両親と一緒にナザレの町に帰られました。そして30歳から公生涯に入るまでの、18年間、イエス様は、忠実に家族を養うためにナザレの町で過ごされました。

さて、父ヨセフは、この後、聖書の中に登場しません。きっと父ヨセフは早く召されてしまったのでしょう。イエス様は大工の仕事をして、長男として、父の亡き後、家計を助けて働いておられたのではないかと思います。

さて、この2章全体には、次の3つの出来事が書かれておりました。

- 1、1～20節、 イエス様の誕生
- 2、21～38節、 エルサレム神殿でのイエス様とシメオン、アンナとの出会い。
- 3、39～52節、 12歳の時のイエス様の姿。

——— その赤ちゃん、少年が救い主メシアだと教えてくれた ———

イエス様は神が人となって、この世に来られた救い主です。でもそこにおられる赤ちゃんを、そして少年を見ただけであるならば、その赤ちゃん、その少年がメシア、救い主であるとは、なかなかわからないのではないのでしょうか。しかし、神様は素晴らしい方法で、その赤ちゃんが、その少年が救い主であるということを教えてくれました。

その1、み使いを送られました。そのみ使いは羊飼いに語りました。(2:10～12節、読む)

その2、シメオンとアンナが語りました。

(28～32節、読む)「シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。・・・」

(38節、読む)「・・・彼女も近寄って来て、神に感謝をささげて、・・・幼子のことを語った。」

その3、少年イエス様自身の語られたことばが教えてくれました。

47節、「聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いた。」

49節、「わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

12歳の時、すでにイエス様は誰からも教えられなかったのに、神が御自分の父であることを知っておられました。そして、その父のみ旨を実行しようと自覚に目覚めていました。イエス様はこの頃すでに、我が道を歩み始めておられたのでした。

52節「イエスは神と人とのいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。」

この様に人としてこの世においでになったイエス様は、どんどん成長して、知恵が進み、からだも大きく強くなりました。そして、天の神様をご自分の父であることをいつも確信しておられました。しかし、地上の両親にも謙遜になって、よく従い仕えられ、真実と愛を示されました。そして今、私たちも、この様な神様からの導きが、助けがあって、この少年がメシア、救い主であられることを知ることができました。

52節のみことばを、私たちに、そして皆さんにも適用しましょう。

「私たちも、ますます知恵が進み、・・・神と人に愛された」

私たちもこの様な人生を歩みたいですね。